### (2) 年祝い

いまは、「人生八〇年」といわれるが、少し前までは「人生五〇年」といわれていた。現在、行われている長寿の祝いは、平均寿命がさほど高くなかった時代に決められたものである。六一歳の還暦、七〇歳の古希、七七歳の喜寿、八八歳の米寿など。これは、近親者が、高齢者を祝福するとともに、その長寿にあやかるための年祝いとされるが、本来は厄年に連なる儀式であった。これらの儀式は、現在ではよく行われるようになったが、以前はあまり一般的ではなかった。そうした中で、比較的行われたのが還暦であった。還暦は、六〇年で生まれた年と同じ干支に還ることからこの名がある。一般に赤い頭巾やちゃんちゃんこ、座布団などを贈って祝う習慣がある。

古希は唐の詩人杜甫（とほ）の「曲江詩（きょくこうのし）」にある、「人生七〇古来希」という一節から名付けられた。喜寿は「喜」の字が草書体で「七七」と書かれるところから、米寿は「米」という字を分解すれば「八十八」となることからその祝いをいうようになった。

いずれも子どもや兄弟が祝ってくれる。米寿のときは記念として一斗枡（ます）のトカキ（斗掻き）が本人から贈られる。トカキは枡に盛った穀物を平らに掻きならす道具であり、永年量（はか）り続けてきたということで、年を重ねた意味が含まれている。





# 四　年中行事

年間を通して毎年きまった時期に繰り返し行われる行事を年中行事といい、正月と盆を中心に生産生活のリズムにあわせた行事が行われる。例えば農村の場合、種蒔きから収穫にいたる生産過程における折り目折り目に神を祀ることによって生産の順調を祈願するというのが基本となっている。これら行事の行われる特別なハレの日は神を祀り静かに忌みつつしむ遊休日であった。

明治二十一年に政府が行った『農事調査』の「一カ年休業日」という項の佐賀郡を見てみると「一年中休業日ハ挿秧後二日其他元旦盆会節句等凡ソ三十二日位ナリ」とある。隣の小城郡では「一年中農家休業ノ日ハ各地区々ナリト雖トモ旧暦元旦盆会節季及ヒ村社祭日挿秧前後数日ヲ常トス。又旧暦四月朔日ヨリ八月朔日迄五日間毎ニ半日ツヽ休業スル村落アリ」と記されている。また明治四十二年四月二十六日の佐賀新聞の記事「農業労働者の休業日」に「農家に休業日なるものを設け、身心を休養慰労せしむる方針をとりつつあるが、佐賀郡は春夏秋冬の別なく太陰暦に依り其日数は年始盆祭各三日づゝ毎月朔日十五日各々一日づゝ五節句各一日づゝ氏神祭禮日産土祭各二日づゝにして往昔と趣きを異にするものは中流以上のもの三大節各一日づゝ休業」と記されている。このようなハレの日は心身を清浄に保つことが必要であったので土をいじったり、下肥を扱うことは禁じられていた。「ふゆう坊の節供働き」ということわざがあるが、普段怠けている者が、節供などの神祭りをすべきハレの

日に、ことさら忙しく働く様子を揶揄したものである。

休業日の一つ、五節句というのは、近世以降に江戸幕府の施策として設けられた五節供（正月七日の人日、三月三日の上巳、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽）のことで、ご馳走をつくって神に供える特別な日であり、年中行事において重要な折り目となっていた。

今一つ、民俗社会には新暦と旧暦の関係がある。明治六年（一八七三）に太陽暦が採用され、今までの太陰太陽暦は旧暦となり新暦と旧暦が併用されるようになった。年中行事は旧暦、新暦、さらに折衷案ともいう新暦の一カ月遅れで行うというのが一般化し、三様の暦日で行われるようになった。それが最近はさらに進み、祭り日が日曜日へ移行しつつある。農村部にも俸給生活者がふえてきた結果、旧来の日程では行事を維持していくことができず、休日である日曜日にかえられたのである。

なお、現在行われている年中行事は、昔より今なお伝えられているものと新しく生まれた行事が混在して行われているのは当然のことであるが、この項でとりあげた年中行事は、すでに廃絶したものも多く含まれている。その時期が明確でないが、かつてはこのような行事が行われていたということで見ていただきたい。

なお、一般的な行事は集落名をあげていないが、特定の集落で行われている行事については記している。

## (一) 正月の行事

年初の行事は、元旦を中心とした大正月と、十五日を中心とした小正月に集中している。月の満ち欠けを日づ





けの基準とした旧暦（太陰太陽暦）では、一年の最初の満月の日、旧暦一月十五日が正月であった。しかし、新暦（太陽暦）が採用されてからは、一月一日（元旦）が一年の始まりとなった。稲作農耕を中心とした農業を営む人々にとっては、元旦よりも旧暦で満月にあたる十五日を中心に、年初の重要な諸行事を営むことが続き、大正月・小正月という二つの正月となった。近代になって新暦の採用によって、満月と十五日とが必ずしも一致しなくなったために、農業を営む人々の間でも、小正月の意味が薄れ、正月といえば大正月を指すようになったのである。

正月は新しい年の始めにトシガミ（歳神）を迎える祭りである。トシガミは正月さんと呼ばれたり、歳徳さんとも呼ばれる。

### 1 正月準備

#### (1) 煤払い

正月を迎える準備は、一年間の煤を払って家屋の内外を清める煤払いからはじまる。現在では暮の大掃除は押し詰まった頃に、都合の良い日を選んで行うのが一般的である。トシガミを迎える宿を清めるという意味がある。

#### (2) 餅つき

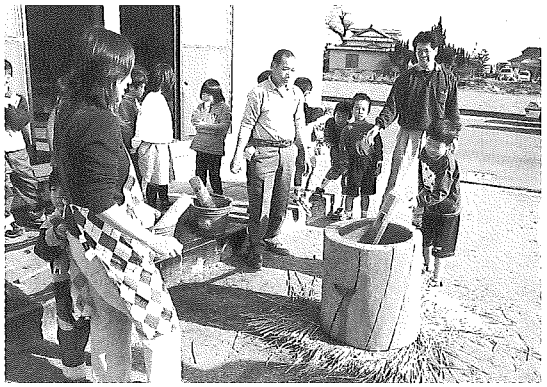
現在は家庭で餅をつくという家が少なくなっているが、暮が近づくと、隣近所数軒がモヤイモチツキ（共同餅

つき）をした。二十五日から三十日ごろまでで、二十九日は苦餅といって避けた。最初の家が早朝三時くらいから餅米をふかし始めても、最後の家がつき終わるのは夜一一時ごろになることもあった。

まず、神仏に供える餅として、鏡餅や歳徳さん餅、ツウの餅（一斗升に供える餅）をつき、嫁の実家の両親に持っていく嫁さん餅、お寺に墓参りするときに持っていく寺上げ餅、そして保存のきく食料として、小さな丸餅やながし餅をつくる。最後に荒神さんに供えるクド型をした荒神餅（なまこ餅という）をつくる。荒神餅は細く小さく作らないと、仁義倒れになるといわれた。多くつく家では一、二俵ほどついた。

### (3) 正月飾り

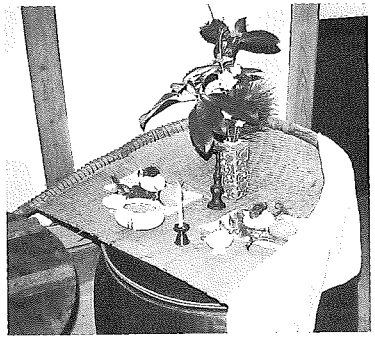
トシガミを迎えるために家の内外にお供えや飾りをする。家の入口のしめ飾りや床の間、神棚、仏壇などへのお供えなどである。しめ飾りにはツンノハ（ゆづりは）とダイダイをつける。床の間は正月用の掛け軸にかえ、鏡餅とテカケのお供えをする。テカケは三方に昆布を敷き、一升ほどの米を盛り、唐炭を中央に立て、ミカンやカキ、クリをまわりにおく。



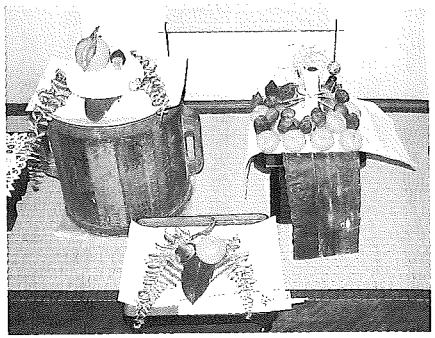
餅つき　正月といえばまず浮かんでくるのが、賑やかだった餅つきであるが、今日では杵と臼で餅をつく昔ながらの風景を見ることは少なくなった。
（児童館　H12.12）







歳徳神への供え物　ニワナカに恵方に向けて箕をおき、餅を供える。
（新田　H13.1.4）



ツウの餅とテカケ　左　ツウ（一斗マス）に供えられた鏡餅。右　テカケには、一生このところに住むという意味が含まれている。
（新田　H13.1.4）

歳徳神へのお供えは、ニワナカの大黒柱の前に臼を据え、その上に恵方に向けて箕を乗せ、重ね餅をする。荒神さんにはクド型の荒神餅を三個重ね、その上に小さな丸餅を三個重ねた。

### (4) 晦　日

十二月三十日はマメジャーといい、嫁の実家の両親のもとに、餅と魚（ぶり、鰯など）、つるし柿などを持って年末の挨拶に行く。

三十一日はお節料理をつくり、夜は、一家そろって運ソバを食べる。

## 2　大正月

### (1) 元旦・お年取り

元旦は、いつもより遅く起きる習いであるが、朝風呂を沸かし家族で身を清める。家庭によっては朝暗いうちから起きるというところもある。そのときに最初に汲んできた、若水で顔を洗い、新しい若水テンゲー（手拭い）を使用する。朝日を拝み、神仏と歳徳神へ

灯明をあげて拝み、新しい年への希望と家族の健康と幸福を願い、酒とナマスコブ、スルメで年取りをする。墓参りや氏神社、香椎神社、恵方の神社参拝、あるいは近所の年賀回りなどをした。現在は風呂にはいることもなくなった。

### (2) 仕事始め

二日の早朝、仕事始めとして苗代田で恵方に向かって土を盛り、ツンノハをさして鍬入れをした。

### (3) おはつい

オハツリともいうが、初入りのことで一月二日ごろに本家に親類が集まって新年の挨拶をする。若嫁は主人とともに実家に帰った。

### (4) 八天さん参り

四日ごろに火の神さま八天神社にお参りに行き、お札をうけてくる。

## 3 七日正月

正月七日は五節供の一つであるが、この日に松飾りやトシガミの供

仕事始め　二日の早朝、主人が田にでかけ、クワで掘りおこし、ツンノハ（ゆづりは）の枝を立てて土を寄せる。　（上恒安　H13.1.2）





物をさげる家もあり、大正月の終了日と考えられていた。またこの日は小正月を迎えるための物忌みの開始日で、身体を清め邪気を祓う日であった。そのための行事が早朝から行われる。

### (1) たたき菜

七草の御汁（たたき菜の汁）をこしらえ、神に供えてこれを食べた。一般に春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロをさすが、数種の野菜を使用してつくる。もともとこの時期に野外で摘んだ新鮮な草を食べると、一年中無病息災でいられるという民間療法的な知恵があったと思われる。

たたき菜というように、包丁の背などで叩いてつくるが、この時に「唐土の鳥が渡らぬ先に七草なずな…」などと詞章を唱える家庭もある。

### (2) 鬼火焚き（ほんげんぎょう）

オネビ焚きともいって、七日の早朝、庭で竹や藁を燃やし一年の災難よけにした。旧年の災厄を焼き払って新年を迎えるという意味が込められているのだろう。前日までに嘉瀬川の堤防の竹やぶから青竹を伐ってきて、やぐら状に組み、中にワラを入れ燃えやすくす

鬼火焚き　火をすべてのものを焼きつくすことから、年初めにもろもろの悪霊を焼きつくして、新年を迎えようとの願いがこめられている。
（上恒安　H13.1.7）

る。当日は他の家より早く起きて行った方が効果があるとされ、また、竹の弾ける音が大きいほうが鬼が驚いて逃げだすといわれた。年徳さんの餅は、七軒の鬼火で焼いて食べると病気をしないといわれた。焼け残った竹の先端を三角に曲げて、屋敷の入口に立てて魔よけにした。

現在は、神社の境内や田で地区の行事として行われている。この日に正月のしめ飾りなども焼かれる。

## 4　荒神さんの餅開き

正月九日に荒神さんに供えた餅をおろした。未婚の女性は、荒神餅を食べると縁遠くなるといわれた。

## 5　御正忌（ごしょうき）

浄土真宗地域では、開祖親鸞（しんらん）の命日として一月九日から十六日まで精進をする。十五日には全員が集まり食事をしながら親鸞を偲ぶ。

## 6　帳の鏡開き

正月十一日は、鏡餅をおろして雑煮などにして食べることを鏡開きという。商いをしている家では十一日の夜、





蔵（倉庫）や帳簿などに供えていた餅を食べる。

## 7　小正月

一月十四・十五日を中心とする正月を小正月といい、元旦を中心とする大正月と対をなしている。旧暦では、その年の初めての満月にあたり、月の満ち欠けを日々の推移の目安にしていた人々は、元旦以上に年初の重要な諸行事の営まれるときであった。小正月の行事は一年の農耕の成果と深く関係すると考えられており、呪術的な儀礼が行われている。

十五日に床の間に供えていた、テカケの米で赤飯をつくり食べる家もある。

### (1)　もぐら打ち

一月十四日の夕方に子どもたちが行う作物の豊作を願う予祝行事の一つである。一間（一・八メートル）ほどの木や竹の先に、藁を束ねた槌状のものをくくりつけた、もぐら打ち棒をつくり、家毎に廻って庭先で歌に合わせて打ち歩き、お礼に餅を貰う。

もぐら打ちが終われば、もぐら打ち棒を折って柿の木にかける。朝、行う集落もある。

田畑を荒らす、もぐらを追い払い、成木に多くの実がなるようにとの願いがこめられた行事である。

へなあれ、なあれ柿の木、ならずの柿をば、千なれ、万なあれ、あすの晩までになあれ

わが子のちぎろうどきゃ、畑のまんなきゃーなあれ、人の子のちぎろうどきゃあー、堀の岸いなあれ
もぐら、もぐら、もんな　なあれ、なあれ柿の木、十四日のもぐら打ち、おかちんな、よごうでも、太かとからくいござい

## 8　大般若（だいはんにゃ）

大般若　600巻におよぶ経典であるが、厄除けのお経として転読法要が行われる。経本で肩や背中、腰などを叩いてもらい健康を願う。
（福所　H13.1.21）

年頭の祈願行事として禅宗の集落で行われる。大般若は「大般若波羅蜜多経」の略で、六〇〇巻からなる仏典である。「大般若経」は災害や疫病を防ぎ豊作をかなえる経典として尊重されたため、これを読誦（どくじゅ）して祈願する。経本が大量なため、実際に読誦することは容易でないことから、各巻の経題と巻数などを読むにとどめ、手で経本をかかげ順次パラパラとめくる転読（てんどく）という方法で行われる。人々は経本で背中や肩を叩いてもらい、病気平癒（へいゆ）や家内安全を祈願する。祈願のしるしとしての祈祷札が集落の入口に立てられる。





## 9　裸ん行

一月十八日に酒造業の杜氏たちは、フンドシ一つの裸になり、数人が連れ立って小城の清水観音参りをし、滝に打たれて寒行をしていた。この頃、茶講内で、女性が清水さん参りをする集落もある。

## 10　二十日正月

一月二十日を明け正月ともいい、正月の飾り物を取り去る。しかし、七日正月を正月の終わりとする家庭もあり、遅い家でも十四日には床の間の飾りを取り去っている。

## 11　年取り直し

二月一日に家によってはトシナイ（年廻り）が悪いといって行った。厄年の者は年重ねといい、正月ほどではないが、もう一度正月のご馳走を食べ、新年を迎えることによって、厄年を去年のこととし災厄を祓おうとするのである。（「三　人の一生・4年祝い・厄年・(1)厄年」参照）

### 12 百手（ももて）

的を弓矢で射て、五穀豊穣、家内安全、無病息災などを祈願する行事で年初に行う。現在は、二月一日に上新ケ江の若宮神社で行われるのが唯一となっている。的は直径約六〇㌢ほどで、竹を組んで紙を張り墨で円を描く。一〇㍍ほど離れた所から、一人、三本の矢を射る。的に当たれば豊作、はずれると注意を要するといい一年の吉凶を占う。

## (二) 春の行事

暖かくなり、いよいよ外での農作業が忙しくなる時期で、体つくりのための慰安行事が集中して行われる。

### 1 節分（せつぶん）・立春（りっしゅん）

立春は二月四日ごろにあたり春のはじまりの日で、これから立夏までを春の季節とした。立春の前日が節分で、

百手　年初めに矢を射るというのは、魔を払うということであろうが、年占い的な意味あいも含まれている。
（上新ヶ江　H13.2.1）





この日の夜に豆まきをする家もある。豆まきは邪気を払い福を招く行事として行われる。

### 2 初午（はつうま）

二月の最初の午の日を初午という。稲荷神社の祭りで、赤いのぼりが立てられ多くの参拝者でにぎわう。かつて、初午の日に女の子や女性が集まり会食をしていた。女の子たちは、かつら流しといって、髪の毛をきり水引で結び、木炭の小片とともに白紙に包み、唱え言をして橋の上などから流す。

へこの川や、この川や、長さ広さは知らねども、流るる先まで延べや黒髪

### 3 粉（こ）つき十五日（じゅうごにち）

旧暦二月十五日でコウセンはたりともいう。近隣の女性が集まり、コウセンをつくり茶講をしていた。コウセンは裸麦を炒り、石臼で粉にし、甘味料として乾燥した柿の皮を使う。もち米の籾を炒って、籾が開き、白い花の形になったものを混ぜて食べる。二月十五日は釈迦入滅の日で、コウセンを口に含むと話しにくくなるが、悲しい日をお喋りをせずに慎むという習わしであった。

## 4　ひな祭り

三月三日に女の子の健やかな成長と幸せを祈る行事として行われる。ふつ餅や節供だごをつくり、タニシを食べる風習があった。初節供には嫁の実家から贈られたひな人形を飾り親類や近所の人を招いて、お祝いをする。

## 5　彼岸（ひがん）

春分と秋分を中日として、その前後三日づつの計七日間を彼岸という。家庭では、ふつ餅（草餅、よもぎもち）やおはぎ、彼岸だごをつくって、寺に持っていったり、隣近所でやりとりをする。寺では説教があり神社や堂宇ではおこもりが行われる。佐賀市願正寺にお参りに出かけることもあった。

弘法大師を祀る堂宇を参り歩く遍路さんが訪れるので、お茶やだごで接待をする。多いときは三、四〇人ぐらいきていたが、現在は遍路をする人が少なくなった。

## 6　潮干狩り

旧暦三月から四月の新月、満月の大潮のときに、有明海の沖合にでて、潮干狩りをしていた。嘉瀬川筋の久富





御番所、福富宇治端、下新ケ江三丁樋尻などから船出をする。午前中に舟をだし、日中、貝や小魚をとり、夕方ごろ満潮で帰ってくる。

男女打ちそろって、芸者や舞子を乗せ太鼓や三味線で賑やかに酒盛りをしながら行われていた。

## 7　お経参り

四月十日から二十日までの間、実相院（大和町川上）で行われる経会（きょうえ）へ女性達がお参りする。ことに死者があった家では必ず参詣する。

## 8　春祭り

陽春の季節に行われる神社の祭りや集落で行う祭りで、農作業の開始にあたり農事が順調に進行することを祈願する祭りであるが、春祭を行う目的の一つは、花見を兼ねているように農作業が忙しくなる前の一種の慰労行事である。ご馳走や甘酒を持ち寄り、青年会が中心となって芝居や狂言、舞踊などが演じられていた。

漁業者の祭りも同様の意味合いがあり春の慰労行事である。

大立野東の沖祇神社の春祭りは集落総出で、おこもりをし、その後中副の龍宮社までお参りする慣習があった。久富東の御髪社では旧暦四月八日には、漁業関係者によって海上安全と大漁を祈願して祭りが行われる。

## 9　堀干し

金肥が豊富でないころの自給肥料といえば、堆肥、緑肥、糞尿であったが、もっとも手近な肥料のひとつに、堀のゴミ（泥土）があった。田を肥沃にするために堀のゴミを田にあげていた。あげた回数で金の分配がなされていたので、堀干しが終わったら、金を出し合い、部落長のところでシミャアゲ（終い祝い）をしていた。

## 10　英彦山参り

佐賀平野部は英彦山信仰がたいへん盛んであった。その理由の一つは藩政時代から鍋島氏が熱心に信仰したことによるもので、英彦山上宮の修築を始め、銅鳥居（寛永十四年・一六三七）など多くの寄進物がある。

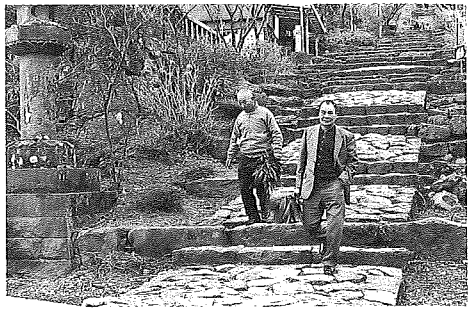
参拝者の多くは農家であるので、英彦山の春祭り、御田（三月十五日）にあわせての参詣が多かった。戦前までは一泊二日で、久保田駅から汽車で行っていた。参詣者がお参りをしているころ、地元では上宮茶講をして無事を祈願した。土産にはお札と飯杓子を配っ

**権現講**　講は各家が廻り持ちで行う。当番を選ぶときは、名前を書いた紙をまるめておき、竹の先で触れて、ついてきたのが神が選んだ家として当番となる。

（下新ケ江　H13.3.26）







**熊笹を手に帰る参詣者**　馬がいるころ、熊笹を食べさせると病気にかからないという言い伝えがあった。（英彦山　S50.3.15）

ていた。現在はマイクロバスを利用して行っている。（「五民間信仰と俗信・(一)民間信仰・1講・(4)英彦山講」参照）

## 11　川神祭り・ひゃーらんさん祭り

四月から五月にかけて行われる。田植えが近づき、堀や川の水が満たされると、子どもたちの水の事故も増えはじめるので、水への感謝と水難防止の祭りが行われる。

藁で作った舟や円座になまずや鯉を描いた幟を立て、なますや豆腐などの御馳走を乗せて、堀や川に流す。ドンコに藁舟を引かせることもあった。近所や親戚の子どもたちを招いてお茶講をして一日中楽しく過ごしていた。

丁永においては、四月十三日に藁で円座をつくり、円座の中に、ご馳走をのせ花を挿し線香をあげ、西丁永堀に浮かべて、「川にひゃーらんように（はいりこまないように）」と願い、夕方、若宮社に各家でつくったご馳走を持ち寄りお籠もりをしていた。昭和五十五年ぐらいまでしていた。

中副の龍宮社は、ひゃーらんさんと呼ばれ水難よけの神として信仰されている。もとは、旧暦三月十三日から一カ月間行われ近郷近在からの子ども連れの参拝人で賑わっていた。石祠の前にはのぼりが立てられ、仮小屋で神札の領布、駄菓子やラムネ、名物のトコロテンなどの店がでて、掛け小屋の舞台で芝居やにわかなどが上演さ

れた。境内にはむしろを敷き、持ち寄ったご馳走をひろげ酒を酌みかわした。

## 12　男の節供

五月五日を端午（たんご）の節供という。本来、端午とは月初めの午の日のことで、必ずしも五日ではなかったが、「午」は五に通じるために五日にされ、五節供の一つとして重要な節日とされた。

現在では、男の子の節供として、三月三日の桃の節供が女の子の節供であるのと対をなしている。初節供のときには、嫁の里から贈られた鯉のぼりやのぼりをあげて、よもぎ餅やご馳走をつくり、仲人や親類を招待しのぼり祝いをする。のぼりは四月末ぐらいから五月末まで立てる。四、五歳になるくらいまで、毎年のぼりを立てる。

## 13　花祭り

五月八日、新暦になって四月八日にしていたが、近年は仏教会の行事として合同で行われているので日時は一定していない。

寺院で、れんげ草や菜の花など季節の花で飾った御堂をつくり、その中の水盤に誕生仏を安置して、参拝者らが柄杓（ひしゃく）で甘茶を注ぐ。甘茶をもらって帰り、飲めば丈夫になり、目につけると目がよくなり、耳につけると耳がよくなるなどという。また、畑にまくと油虫がつかない、蛇がこないともいわれた。家庭ではふつだごをつくっ





て仏前に供える。

## 14　ご誕生

浄土真宗地区の福富では、五月二十二日に親鸞（しんらん）聖人の誕生日が行われる。午前中に苗代の床上げをし、午後は永明庵でお経をあげ、その後持ち寄った肴で酒宴を開いていた。この日を境に麦刈り、苗代の種まきをする。

花祭り　園児によって引かれる白象は、釈迦が母摩耶夫人に宿ったとき、摩耶夫人が夢見たといわれる白象である。

（妙鎮寺　H13.5.19）

# (三)　夏の行事

陰暦五月を迎えると農家では、田植え準備で忙しくなる。田植えは農家の最大の行事である。雨をサミダレ、田植えをする女性をサオトメ、苗をサナエ、田植え終わりの宴をサナボリという。これらの頭についている「サ」は田の神を指しているといわれており、田植えは田の神との共同作業であった。

## 1　田の神さん祭り

田植え始めに稲作を守護する田の神を迎えて豊作を祈願する祭りである。ニワナカの荒神の前に臼を置き、その上に箕を乗せて祭壇とする。箕の方向はその年の恵方とする。苗代からとってきた三把（二把というところもある）の早苗と、ネコブ（根のついた昆布、塩ワカメというところもある）を乗せた丸い大きな握り飯・尾頭つきの魚・ナマス・煮シメなどを供え、柳の木でつくった箸を添える。ネコブは苗の根つきが良くなるように、柳の箸は柳腰で田植えがはかどるように、腰が痛くならないようにとの願いが込められているという。

祭り日は一定しないが、酉の日に行うという所が多い。「鶏のようにさばけるように」との願いがあった。逆に丑の日はさばけないという理由で避けられた。尾頭つきの魚は、一番の働き手、馬使いが食べるものとされている。祭り終わった早苗は荒神棚に供えておき、雷が落ちたときに、苗を投げるとすぐに火は消えるという。

## 2　厄入り

新六月一日は男性四一歳、女性三三歳の大厄に入るとき、無事に厄から逃れるように祈願をする日であった。清水観音に願かけに行く。（「三　人の一生・4年祝い・厄年・(1)厄年」参照）





## 3　さなぼり

さなぼいともいう。田植えの無事終了を田の神に感謝する行事で、チャーキ（馬の鞍）をマガ（馬鍬）の上にのせ、床の間に飾り、さなぼり餅（あん餅やよごれ餅）・なます・豆腐などの料理を供えた。葦（当地では、ヨシという）で箸をつくり添えて、これで、ヨシとするところもある。料理は馬使いが酒を飲みながら食べた。また、餅は田植え加勢を受けた家に配り、ゆっくりと休み、嫁は里帰りをすることもある。

## 4　六月朔日

旧六月一日に保存していた正月の年徳さん餅を、この日に食べると流行病気にかからないといわれた。特にシエンシャク（胃）の薬になるという言い伝えもありキゴモチ（きな粉餅）にして食べたりしていた。

## 5　沖の島参り

旧六月十九日に有明海の孤島、沖の島に沿岸の集落から行く。提灯やのぼりを飾りつけた船に乗り込み、浮立を囃しながらの沖の島参りはたいへんな賑わいをみせる。

（「五民間信仰と俗信・㈠民間信仰・4海に関わる神仏の信仰・(1)沖の島信仰」参照）

## 6 土用丑の日

土用は四季にあるが、現在は梅雨明けの夏の土用だけが普通いわれている。年間の最も暑い時期であり、うなぎを食べて夏ばてを防ぐことは一般によく知られている。かつてはうなぎだけでなく川魚を食べると良いといわれていた。また最初の丑の日に小城の清水観音に青年男女等が参詣していた。

## 7 祇園祭り

夏祭りの代表は祇園祭りである。古く、疫病をはじめ種々の災厄をもたらす原因を、この世に恨みを残していった人々の荒々しい霊魂、すなわち御霊であると考えた。その御霊を祀り鎮める御霊会が祇園祭りの始まりと考えられる。各地の祇園祭りでは鉾や人形などで飾られた山車が囃子にのって賑やかに巡行するという形をとっているものが多い。小城の須賀神社の祇園祭りなどがそうである。

久保田宿の祇園社では旧六月十五日に祭りが行われていた。昭和三十七年ころまでは歌や踊り、にわかなどと多彩な余興が行われていた。町内はもとより近隣の町村からの参拝客で賑わった。その後、祭りの推進役である青年の不足により中断をし神事のみ続けられていたが、昭和五十八年に復活し、子ども神輿などが行われていた

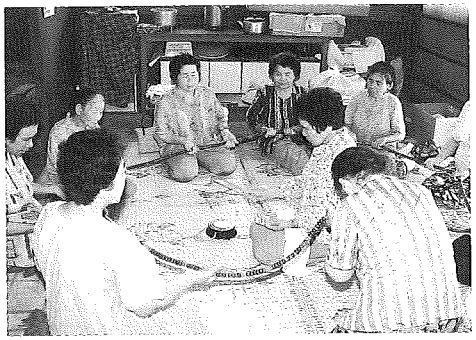




が、再度中断の危機がせまっている。

## 8 お念仏

下新ケ江の地蔵堂では、旧暦六月二十三日から二十五日まで祇園祭りがおこなわれていた。祇園祭りの一週間前ぐらいに、お念仏が行われる。お年寄りが集まり、輪になって大数珠を持ち、音頭取りの鉦にあわせて南無阿弥陀仏と唱えながら、大数珠を三回廻し、最後に全員で「南無一切ガトウヨシ神御成仏、南無大神大明神さん、村一切流行り病気のはやらんようにしてください」と三回唱和する。もとは各家を廻って行っていたが、現在は、地蔵堂内で済ましている。



お念仏　多人数で大数珠を繰りながら念仏を唱える行法を、百万遍という。さまざまな厄除けや祈祷に行われる共同祈願である。
（下新ケ江　H12.7.20）

## 9 豆祇園

七月から八月にかけて集落にまつられている氏神社や堂宇で行われる夏祭りである。主として子どもたちの行事で神仏により男女別に行う。例えば観音さんは女の子、地蔵さんは男の子で、子どもたちは堂宇を掃除し提灯で飾る。祇園の志といって、各家からソラ豆を集めてまわり、親の加勢をうけて、大釜で豆を煮てお茶の準備をする。夕刻

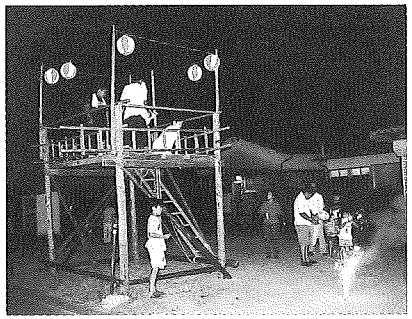
から訪れる参拝者に豆やセンペイ、お茶で接待をする。

男の子は、数日前から祭りの準備として、各家からバンコやハシゴを借りて、舞台をつくる。夜はカヤを吊って泊り込みをしていた。祭りが終わるとオサンセン（お賽銭）と手だしをして、年長者の家でシミャアゲをした。

久富では、子どもたちが、集落の東、嘉瀬川堤防横のおーがんさん（御髪社）から、西の出はずれの地蔵まで六カ所の神仏にお参りをし接待のお菓子を貰う。もとはソラ豆や小豆などの煮豆やコウセンを貰っていた。

青年が行うところもあった。新田では青年が、天満宮で参拝者に焼酎と梅干しで接待をしていた。

福富では、旧暦七月十五日に子どもたちが各戸よりソラ豆一合と砂糖を湯呑み一杯集め、煮豆をつくり夜に八幡神社で参拝者に配る。子どもたちは神社の一隅に泊まり、肝試しなどをして夜遅くまで遊んでいた。



豆祇園（その1）以前は子どもたちが自分たちの力でやぐらを作っていたが、今は父兄が組み立てている。
（福島　天神豆祇園　H13.7.31）

豆祇園（その2）お参りにきた人たちに子どもたちにより、神酒や肴が振る舞われる。
（大立野北　地蔵豆祇園　H13.8.5）





## 10　四万六千日（しまんろくせんにち）

旧暦の七月十日は、四万六千日といって、この日に観音に参拝すると四万六千日の功徳があると伝えられている。

## 11　七夕まつり

八月六日の夜、女の子たちは年長者の家に集まり、自分たちで料理をつくり食事をし、千代紙で着物や七夕飾りをつくり、その夜はそこに泊まって過ごしていた。翌朝、露草や水芋の葉にたまった朝露で墨をすり、願い事を書いて男竹に吊るし庭に飾った。朝露で字を書くと上達するとも言われた。家庭では七夕まんじゅうをつくる。

家庭においては、現在七月七日にするところが多い。

# (四)　盆行事

盆というのは、先祖の霊を迎えて供養する先祖祭りのことで、八月十三日から十五日にかけて行われる。一般には盂蘭盆（うらぼん）といい、ウランバナ（サンスクリット語）の音写（漢字を当て字にすることで、漢字には意味はない）で、倒懸（とうけん）と訳されており、倒して懸ということで、逆さまに吊るされる耐えがたいほどの苦しみ、それがウラン

バナといわれている。さらに『盂蘭盆経』の説話にある、仏弟子目蓮が餓鬼道に堕ちた亡き母親の苦を救う法を釈尊に求め、百味の飲食（さまざまな料理）を施したことに由来するものとされる。

盆行事は仏教行事の様相をしめす一方、民俗行事として多様な展開が見られる。

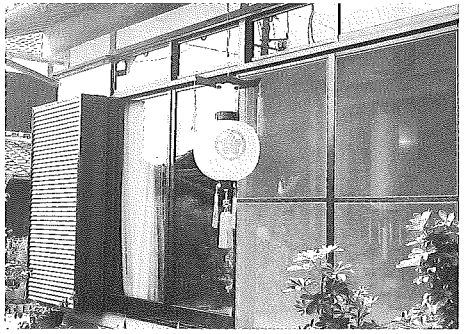
### (1) 盆の準備

七日の七夕を盆の準備の日とするところもあり、墓掃除をしたり、仏具を洗ったりしていた。盆の期間中は仏壇とは別に精霊棚を作り位牌を安置し供物を供える。精霊棚の敷物となるコモは一間半から二間ほどの長さに編まれる。このコモは盆が終わったあと、籾を収納する巻きどうらに利用する。

縁側には迎え提灯（十五日が過ぎれば、送り提灯となる）をさげる。初盆のときは八月いっぱい掛けていた。盆に迎えられるのは祖霊であるが、このほかにまつられることなく、祟りやすくこの世に害をもたらす無縁仏（餓鬼精霊）もまつられる。盆の間に親類や初盆を迎えた知人宅にお参りに行く。ソウメンや線香、ロウソクなどを持って行く。

### (2) 十三日　精霊迎え

精霊棚には盆花を飾り、盆ダゴ・盆菓子・果物・イモ・ナガマメ・サ



迎え提灯　盆が近づくと縁側の軒先に迎え提灯が吊される。精霊への目印であろう。
（永里　H13.8.13）





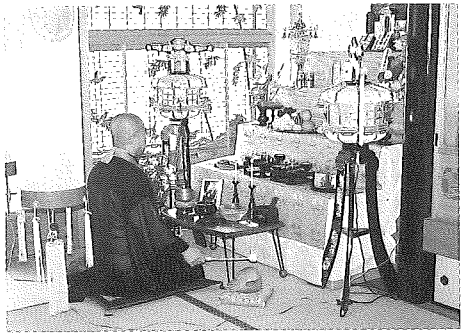
ヤのついた大豆などを供える。この日はお茶を何度も供えるが、一回だけしかうけんさらん（飲まれない）と言われた。また、暑かったろうと、うちわであおいで迎える。

### (3) 十四日

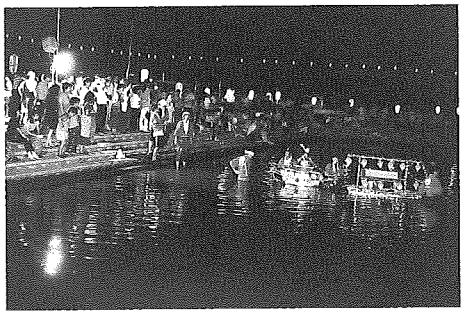
禅宗の家庭では朝、昼、晩と供物の献立をかえて供え、家族も同じものを食べるので、主婦は多忙をきわめる。十五日も同じである。この日は特に御先祖さまが早く寝るから、家の者も早く寝ないといけないとされた。（「二衣食住・(二) 食と生活・2ハレの日の食事・(1)年中行事　盆」参照）

### (4) 十五日　精霊流し

夕刻になると、精霊棚の飾りつけを取り外し、供物を麦わらでつくった舟に乗せ、精霊流しをした。現在は平成二年から、商工会主催の精霊流しが、嘉瀬川で行われるようになり、精霊舟も豪華になった。



盆の供養　菩提寺の僧侶により盆供養のお経があげられる。
（溜東　H13.8.14）



精霊流し　盆に迎えた先祖の霊は、その供物を送ることによって他界に帰って行くと信じられている。
供物を乗せた精霊舟が海に流される。
（嘉瀬川　H9.8.15）

永里では、十六日に施餓鬼会を行い、新仏を中心に有縁無縁の霊を弔っている。

真宗地区では、十四、五日の夕方に子どもたちが盆参りをする。各家を廻り仏前にオッパン（仏飯）さんを一つかみ供えてお参りをし、お礼にセンペイなどのお菓子を貰う。現在は十五日のみ行われている。

## (五) 秋から冬の行事

秋は収穫期である。収穫祭りとしておくんちや集落ごとの大祭りが行われる。また太陽が日に日に弱くなる時期でもあり、やがて寒い冬がやってくる。

### 1 八朔（はっさく）

旧暦八月一日を八朔といい、稲の実りの前の豊穣祈願が行われていた。二百十日も近いので、風除けの祈願もなされる。

大立野東の沖祇神社で八朔の祭りが行われていた。戦前までは、青年が御神体を水で洗っていた。漁業の神として小城郡や杵島郡、佐賀市南部、諸富方面から、青年をはじめ多数の参詣者が訪れていた。三日間ほど、祭りが続き舞台では狂言などが興行され賑わいを見せていた。





### 2 秋彼岸巡り

春の彼岸と同じように、仏堂を白衣の巡礼姿の人々が巡ってくるので、お接待をする。ダゴやオハギをつくった。

### 3 芋名月

旧暦八月十五日は十五夜で、満月を眺めて月見をしていた。イモノコ（里芋）を塩水でゆがいて、鉢に盛り、庭に置いたバンコの上にススキと一緒にあげて月見をした。

### 4 堀干し

十月十日に田の水、堀の水を落とす落水をして堀干しをしていた。この日に、くんちに使う鮒などをとっていた。

### 5 おくんち

九月九日は陽数（奇数）の最大である九が重なるために、重陽（ちょうよう）と呼ばれた。現在では重陽の節供を祝う風習は、

一般ではほとんど見ることができないが、九月九日を節日とする感覚は残されていて九日・十九日・二十九日をクニチといい、餅を搗いたり赤飯を炊いて祝うことが行われている。稲の収穫期と重なるので、秋祭りとして行われるようになった。

昭和の初めころまでは、明治天皇の天長節、九月二十九日に行っていたが、昭和のなかばになると、農作業の日程などでたびたび変更され、終戦後は十月二十三日となり、近年は第三日曜日に行われるようになった。

オカセンさん（香椎神社）のくんちは、神輿のお下り、お上りが行われ、浮立や手踊りなどがでて賑わいを見せる。家庭では鮒のこぶ巻きなどのくんち料理をつくり、親類同士のくんちみやり（参り）に忙しい。

〈参　考〉

浮立（ふりゅう）は、風流の転化で、雅びやかなもの風情あるものという意味がある。佐賀県は浮立の宝庫ともいえるところでほぼ全集落で行われていたが、近年は伝承している集落が少なくなってきた。

久保田町内では、沖の島参りに奉納される太鼓浮立と、香椎神社のおくんちに奉納される、ぜんじゃーこ（銭太鼓）浮立と面浮立が伝承されている。

神輿のおのぼり　一年に一度、氏神は神輿にのって、氏子地域を巡行する。
(H1.10.15)





沖の島参りは旧暦六月十九日で、有明海沿岸の集落で行われている。香椎神社の奉納浮立は大字単位で四年に一度当番としてまわってくる。

**ぜんじゃーこ浮立**　銭太鼓という道具が主体の浮立である。銭太鼓は直径五チン、長さ三〇チンほどの竹筒の中に銭や鈴を仕込み、振ると音がでるようになっており、筒の表面を色紙で飾り、両端に飾りの房がつけられている。ほかに、もりゃーしという締太鼓を胸前に吊るした女性の一団がつく。

囃子に合わせて、銭太鼓を体の各部にあてたり振ったりして踊るものである。笛・大太鼓・鉦の囃子がつく。曲名は道行・鳥居がかり・神の前・ヨツマクリ・ミツマクリ・デハの六曲がある。

麦新ケ江と新田では昭和二十八、九年ころまで浮立をしていたが、ねじもりゃーしといい、体を大きく反らす（ねじる）所作に特徴があったという。

**面浮立**　横江・上新ケ江地区で伝承されている。上新ケ江の面浮立は、明治三十四、五年ごろに芦刈町東道免から伝承したものである。

横江の面浮立は、口承によると、明治三十年代の終わり、横江の某家に作男として住みこんでいた若者が、仕事を終えて夜になると笛を吹いていた。その音色の美しさに近くの人々が集まってくるようになった。若者はこれは自分の里に伝わる浮立というもので、田植えと収穫が終わった後に

ぜんじゃーこ浮立　竹筒の中に銭や鈴が入れてあり、振ると音がでるようになっている。体に打ちあてて踊る。(香椎神社　H11.10.11)

もりゃーし　華やかな花笠と衣装のもりゃーしの女性たち。囃子に合わせて胸の前に吊した締太鼓を打ちながら踊る。
（香椎神社　H13.10.21）

太鼓浮立（その1）大太鼓・締太鼓・鼓・大胴の太鼓が主役の浮立である。沖の島参りのときに囃される勇壮な浮立である。
（堀干しフェスタにて　沖の島一心会　H11.9.25）

氏神に奉納するものであるといった。横江の人々は、くんちに奉納しようと若者から習い、明治三十八年の久保田くんちで奉納したのが、横江の面浮立の始まりと伝えられている。

明治四十二年に二〇名分の鬼面を芦刈村弁財の面師に発注購入をし、更に後年鹿島より三名分の鬼面を購入するなど充実がはかられた。しかし、昭和になって支那事変、第二次世界大戦などで中断し、戦後、昭和二十五年にようやく復活をした。

この頃までは、笛や大太鼓、鉦といった囃子方が十分でなかった。それで、横江の面浮立はどこの系統なのか調べた結果、長崎県高木町湯江が同系統とわかり、湯江に習得にいったり、師匠を招いたりして、囃子方の稽古が続けられ、他地区の面浮立と遜色（そんしょく）のないものとなった。四年毎に氏神社の八幡社や香椎神社で奉納している。

構成は、

宰領人　三～五名　部落長および古老が責任者となる。

旗持ち・提灯持ち　各一名　旗、提灯を持って浮立の先導をする。浮立を踊る所の確認など、宰領人と連絡しながら進行する。

踊り子　二〇名から三五名　鬼面をかぶりシャグマをつける。紺の法被に股引きをはく。法被には牡丹に唐獅子や鎖り鎌の模様がはいっている。腹部に締太鼓をつけ、手甲、脚半をし白足袋に草鞋をはく。

鉦打ち　五名以上

笛　三名以上　陣笠に羽織袴に足袋草履をはく。

大太鼓　三名

**太鼓浮立**　有明海沿岸集落を中心に広く伝承されている浮立で、鹿島地方の一声浮立、武雄地方の皮浮立といわれるものと同種の浮立である。

太鼓類が主体の軽快なリズムをかなでる浮立で、笛のほかは大太鼓・舞太鼓（締太鼓）・つづみ・大胴の太鼓だけで構成されている。

太鼓浮立（その2）H12年に結成されたＪＡ婦人部による華菱太鼓。
（堀干しフェスタにて　H13.10.13）

面浮立　面浮立は、佐賀県を代表する民俗芸能の一つである。その勇壮な舞から、戦国時代の戦いに由来するという伝承がある。
（香椎神社　H13.10.21）

## 6　お日待ち

稲刈りが終わった、旧暦十月十

五日に、おテントウさま（太陽）に感謝して、オテントサン餅を供える。十四日の晩より、寄待ちといって当番の家に集まり餅をついて、夜を過ごし朝日を拝む。親を亡くした家は三カ年の忌みに服し、お日待ちを行わないので、近所から丸餅一つ、たち餅二つが十五日の朝に贈られた。

## 7 お初穂（はつほ）

十一月十六、七日にシンミャー（新米）を炊いて、神仏に供えた。

## 8 亥（い）の日（ひ）祭（まつ）り

十二月第一亥の日に、結婚によって新たに縁ができた家同士、婿の家、嫁の家、分家などで互いに招いて親睦を深める行事である。農家において行われた。十月、十一月にするところもあり、おはぎをつくる。

## 9 大黒さん祭り

旧暦十一月を子の月といい、この月の子の日に大黒天をまつる。神棚から大黒天をおろし、ソロバンと二股ダイコンを

大黒天　インドからきた大黒天は、日本で大国主神と習合し、子の日を縁日とする。食物の神、稲作の神、金銭に不自由しないという信仰がある。像の下のマスの中には銭貨がはいっている。（麦新ヶ江　H14.2.16）





供えて家の繁盛を願っていた。

## 10 師走（しわす）の十三日（じゅうさんにち）

年雇いの満期交替日で、一年間働いた勤怠の精算の日であった。

## 11 大祭り

十二月にはいると、各集落では収穫も終わり一年間無事に終えたということで総仕舞いの祭りが行われる。老若男女、一家総出で当番の家に集まり朝昼夜の食事を共にし親睦を深めあった。現在は簡略化されて行われている集落が多い。

丁永では若宮さん祭りとして十二月十三日に行われていた。祭りの前日に各戸よりもち米を一軒に五合、一人に二合づつ寄せる。祭りの日は早朝から赤飯を蒸し、ハクサイやタカナのオコモジをつくり、塩イワシを焼いて朝食にする。夕食はサシミに混ぜご飯をつくる。

福富では、十二月十五日に八幡神社で祭りが行われる。神酒・魚・ごっくうさんを持って、香椎神社に参拝を済ませた後、八幡神社で男性はナマス、カケアイなどを肴に酒宴をする。

祭帳　代々、引き継がれてきた祭帳は絶えることなく祭りが行われてきた記録である。（大立野北）